書評

南川文里　著『未完の多文化主義 －アメリカにおける人種，国家，多様性』

（東京大学出版会，2021 年）

鈴木赳生[†]

本稿は，2021 年 1 月に出版された南川文里著『未完の多文化主義－アメリカにおける人種，国家，多様性』（東京大学出版会）の手短な論評である。出版当時，「また読まなきゃならん本が増えた」と思いながら大学書店で本書を購入した評者は，しかし修正渦中の博士論文に本書を組みこむ余裕はなく，本棚に積んだままにしていた。だがその後幸いにも異動先の同志社大学で，本書の合評会（同年 7 月）の評者を務める機会に恵まれた。せっかくならばその記録も兼ねて，また同会でうまく伝えきれなかったことを改めて言葉にするためにも，と考え，文章として書評を残しておこうと筆をとった次第である[(1)]。以下では煩雑さを避けるため，本書からの引用はページ数のみで示す。

評者のような多文化主義研究者にとって，あるいはより広くアメリカ合州国の政治や文化，人種・エスニシティにまつわる諸問題に関心のある読者にとって，本書の学術的・社会的意義は疑いようがない。地道な資料収集に裏打ちされた堅実な知識史の理解，専門外の読者にも比較的フレンドリーな明快で整頓された論述は，本書がこの研究領域の重要文献リストに登録されることを約束している。アメリカ研究ではなく多文化主義研究の視点からすると，本書の意義として少なくとも 2 点が挙げられる。

第一は，多文化主義研究を再出発させるための土台づくりに貢献したことである。多文化主義は，それが政治理念として英米圏を中心に広く普及していった 1980 年代当初（あるいはそれ以前）から，それを周縁化された人々（「黒人」，「移民」，etc.）の権利獲得や文化的承認のために活用しようとする推進派，こうした動きに反発し「古き良き」単一文化世界の幻想を守ろうとする保守的な論者，さらには逆に，既存の法政治的秩序の枠内で制度化された多文化主義には十分な力がないとしてより変革的な反人種主義を求める革新派などが入り乱れ，乱戦の活況を呈していた。このような是非論，擁護と非難・批判の応酬がしばらく続いたのち，9.11 から幕を上げた 21 世紀には，国家内の「文化的差異」を「テロリズム」と結びつけて危険視し，監視し取り締まる保安国家

[†]同志社大学社会学部嘱託講師
*2021 年 12 月 15 日受付，2021 年 12 月 16 日掲載決定

（security state）がさらに発達するなかで（Crosby and Monaghan 2018 : 3-4），多文化主義にはその「危機」や「失敗」，「後退」，さらには「死」が宣告されていった（Kundnani 2002 ; Joppke and Morawska 2003 ; Lentin and Titley 2012）。現在の多文化主義研究が避けて通れない問いは，こうした紆余曲折と反動を経たあとで，そして保安国家と新自由主義の企業的人間観・弱者切り捨ての論理が常態と化す世相のなかで，多文化主義という概念とこれをめぐって展開してきた議論にどのような現代的意義を改めて与えることができるのか，というものである。これに対して本書は，多文化主義の入り乱れた論争史のもやの最中から，そもそも「多文化主義という事象が『何』であったのか」（p.40）を正確に把握しなおそうとする手堅い研究書である。多文化主義研究の現在地を見定めるには，まず多文化主義の輪郭を捉え，これまでの多文化主義研究の達成と限界を再確認・再検討することが欠かせない。評者はこの必須だが根気を必要とする作業に従事する同じ志をもつ研究者として，著者の仕事に敬意を表する。

第二の意義は，アメリカにおける多文化主義史にひとつの明瞭な見取り図を与えたことである。アメリカで多文化主義と呼ばれる政策や制度は，カナダのように国家全体の統治理念として連邦政府自らによって推進されてきたというより，企業，学校，州ごとの行政，司法など種々のアクターが絡みあう多元的な構築過程を経てきた。そのためたとえ多文化主義研究者であっても，評者のようにその歴史を傍目で学ぶ者にとって，アメリカの多文化主義というのは複雑で見通しがたいものである。これに対して本書は，人種リベラリズム（racial liberalism）から積極的措置（affirmative action），そして多様性の称揚に至るアメリカ多文化主義のうねった道を緻密にたどりなおし，その連続性と変容の過程をとらえた。この過程ではまず，平等の達成にあたって差異を考慮に入れない人種リベラリズムの「中立性」規範が，黒人運動をはじめとするさまざまな差異の運動によって挑戦を受ける。その結果，当人にはどうしようもない社会的な位置の不平等，つまり奴隷制など歴史的な不正義に根をもつ居住や教育などの不平等を是正するには，ただ消極的に「中立」というだけでなく，たとえば優遇制度などを通して積極的に介入していかなければならない，という新たな規範が芽吹いていった。すでに歴史的に形成されてきた顕著な不平等がある状況下で，「中立」などというものはあり得ない。どこかに「立つ」時点で，あらゆる立ち位置はすでにして偏りと歪みの泥沼に浸かっている。こうしたことが気づかれていったわけである。だがこのような変革の動きに対しては，保守的な反動が起こるのが常である。この反動に妥協する形で，新たにうみだされつつあった積極的介入の規範が実質を伴わない「多様性」の称揚にすりかえられていった結果，構造的不平等や過去の不正義を是正するという問題意識は失われていく。本書は「中立性規範」や「多様性規範」という概念を軸として，このような歴史物語をわかりやすい形で紡いだのである。そのなかで取りあげられる事例は他の研究でもよく目

にする典型的なものであるため，研究の対象自体に新規性があるというより，分析の緻密さと語りの明瞭さに際立ったものがあると言えよう。

さて，以上のような観点から本書が間違いなく一流の多文化主義研究書であることを十分に踏まえたうえで，以下では本書に対し，あるいは本書に代表されるような現代多文化主義研究のありように対して，批判的な問題提起をおこないたい。これは主に上述の第一の意義，つまり「多文化主義とは何だったのか」を明確化することにかかわっている。改めて強調しておけば，評者はこの作業に強く賛同する。だが同時に，本書を一読した評者の読後感は，賞賛する気持ちと「またこれか」，「もったいない」という感覚が入り混じるものであった。「またこれか」というのは，多文化主義の射程と限界を再確認する作業がその出発点からすでに狭められた多文化主義観に立っているために，それを再生産し強化してしまう，という循環に対する感慨である。

鄭暎惠が本書の短評で明快に述べたように，本書は「『多文化主義ではないもの』から多文化主義とは何かを考える」（鄭 2021 : 171）試みと言えよう。つまり保守的な反多文化主義を詳細に検討することで，逆にそれとの対照で多文化主義の輪郭を浮き彫りにする。だがこの問題設定こそが落とし穴である。ここで言う「多文化主義／多文化主義でないもの」の対は，知らず知らずのうちに反動の言説や運動に沿って設定されることで，すでに狭く限定されてしまっている。多文化主義という語をめぐってなされてきた多様な言論・研究（以下「多文化主義論」と総称）のなかで，本書が「国民国家の内部において，同化主義を拒否し，多様な文化の共存と包摂を促進する社会制度を，自由民主主義的な理念のもとで追求する思想・制度・運動」（p.25，強調は除去）と定めるものは，しばしば「リベラル多文化主義」と呼ばれる一角に過ぎない。この意味での多文化主義は，「一般に多文化主義というとき，おそらくもっとも広く念頭に置かれて」（米山 2003 : 20）きた，つまりは自由民主制において主流の支配的な考え方・立場である。

これに対して多文化主義論のなかには少なくとも，以下のような豊富なアイディアが詰まっている。たとえば，人的資本の「多様性」が生産性向上につながるといった論理で差異を称揚し企業体へ組みこもうとする①「多様性管理」あるいは「コーポレート多文化主義」と，この管理の動きに抗して差異のポリティクス（反人種主義運動など）の変革的な力を回復させようとした②「批判的多文化主義」；最終的には差異を国民的統一のために抑圧するリベラル多文化主義に対し，差異の存在がその統一の内にある食いちがいを繰りかえし露呈させ一貫性を切りくずすことを強調した③「多文化の転裂」論や，差異を一枚岩なものとして固定化する「文化」観に代わって流動性・越境性に着目し，ときに世界市民としての平等の理想に訴える④「ポスト多文化主義」；政策や理念の次元ではなく，人々が実際に互いの相違を経験し交渉する日常世界を活写してきた⑤

「日常多文化」研究[2]。

このように多文化主義論の豊かな系譜を思いおこせば，「多文化主義／多文化主義でないもの≒リベラル多文化主義／反動」という暗黙の図式の狭さがみてとれるだろう。この図式ではいわば，多文化主義という全体（P）の部分集合であるリベラル多文化主義（p 1）が全体とすりかえられることで，本来 P に入るはずの他の多文化主義論（p 2, p 3, p 4，…）も一様に「多文化主義ではないもの」（非 P）として視野の外へ追いやられてしまう。問題はこのように，一部であるはずのリベラル多文化主義／反動が多文化主義論の全体を覆うかのように語られ，この語り口によって他の重要な諸潮流が視野の外に追いやられる知的慣習である。この慣習に無批判に従いそれを再生産している限り，「多文化主義が何であったか」を明らかにする作業は，「すでに多文化主義がそうだとよく言われているもの」の範囲内に留まってしまう。これでは，多文化主義論に新たな現代的意義を見いだそうとする研究の土台としてあまりに狭いのである。つまり本書では，掲げられた広い問いと狭い応答が一致していない。

この土台設定の狭さという問題は，批判とは何をすることなのか，という問いにもつながる。本書は保守的反動の言説をとくに詳しく取りあげ，細部まで分解し検証することで，いわばそれを内側から解体しようとしている。この批判作業自体は十分に意義のあることだが，もっと短く済ませてよいことだと評者は考えてしまう。本書はあまりに反動の解体に努力を傾けた結果，「多文化主義が何であったのか」という問いに含まれる豊かさと可能性を切りつめてしまっているのではないか。批判におけるよく知られたジレンマは，ある対象を批判するにはそれをよく調べ，その内実を詳しく記したうえで批判しなければならないが，そうすることでむしろ批判対象の存在感，論述における比重を高めてしまうということである。むろん，いままさに評者がおこなっているように，批判対象自体にそれだけの価値があるならば良いだろう。だが著しく狭隘な反多文化主義論に，それだけの労力を傾ける価値はない。先に述べた「もったいない」という本書の読後感は，ここから生じる。反動論などに必要以上にかかずらうことなくもっと他方面に労力を割けば，より刺激的な論述が出てくるだろうに，と感じてしまうのである。あまりに多くの研究者が反多文化主義や排外主義の解体に躍起になればなるほど，「そうではない」別のリアリティや可能性をみいだす批判の力は失われていく（この問題について，より一般的には Hage 2015）。

批判は，既存の議論や批判対象の設定する範囲を超え，より広い知の地平を切りひらくためにこそある。このイメージを示すために，本書が結論で触れている交差性（intersectionality）の視点を例として取りあげてみよう。著者は「交差性への批判的視点を蓄積してきた社会運動と，多文化主義的な政策のあいだのさらなる相互対話が求められる」（p.303，強調は引用者）として，論述の最後で交差性，つまりはさまざまなカテゴ

リ（「人種」，「セクシュアリティ」，等々）が相互作用することでうみだされる効果に着目していく展望を述べる。このくだりを読んだとき評者が抱いたのは，「それはゴールではなくスタートラインだろう」，という印象である。これはなにも本書に限ったことではない。黒人フェミニズムやチカーナ・フェミニズム，先住民フェミニズムといった「色のあるフェミニズム（feminisms of color）」から出てきた交差性の論点が学問界に膾炙するにしたがって，一通りの議論を済ませた後で「交差性の論点も重要だ，今後取りいれていきたい」と取ってつける慣習が広がっている。

だが，これでは決定的に重要なことが逆転している。交差性（より広く言えば差異）とはみられる対象（「交差性への視点」）ではなく，経験者の立ち位置なのである。つまりそれはある分析に付け加えられる対象ではなく，分析の前提，ある対象（たとえばアメリカ多文化主義の歴史）の立ちあらわれ方そのものにかかわる。差異とは物のように「そこにあり」，分析を待つ実体的対象ではなく，社会的立ち位置の違いから生じる社会の感じられ方・経験のされ方の違いなのである[3]。「色のあるフェミニズム」が「色」をつけてきたのは，超越する視点からすべてを押しなべて把握し評定する一元的基準と，この基準によってみえなくされる多元性である。「無色」とされてきた前者は「白」，後者は「黒」，「赤」などと色づけられ可視化されることで，すべての立ち位置は無色普遍ではなく，それぞれの位置に応じた異なる視点から異なる社会像がうまれることと，各々の社会生活に異なる種類の不平等がついてまわることが明るみに出された。このように差異や交差性という問いは，社会現象を観察し分析する視点や基準自体を変えるものだったのである。

したがって真剣に交差性（差異）の視点を取ろうとするならば，分析がその土台から変容することを受けいれなければならない。交差性（差異）がスタートラインというのは，この意味においてである。著者が言うように交差性の問題提起と「多文化主義的な政策」との「さらなる相互対話」をおこなうということは，ここで「多文化主義的な政策」や「多文化主義」と呼ばれているものの見方とともにその姿自体が根本的に変わってしまい，もはや以前の狭く固定的な視野には戻れない不確定な変容に身をさらすことなのである[4]（ここで詳述はしないが，同様のことは本書が言及しつつも取りいれはしない「定住者植民地主義（settler colonialism）」の視点についても言えるだろう（p.4, 21, 27, 31, 37））。

批判とは，前もって定められた知の基準のもとで安住するのではなく，それに振動を加え，異なる地平を切りひらき，批判者自身も変身しつづける運動である。この運動へのいざないでもって，本稿を閉じることとしたい。

付記

本稿は JSPS 科研費 21J00689 の助成を受けた研究成果の一部である。

注

(1) この機会を与えてくださった森千香子さんに感謝いたします。なお，この合評会をとおして著者の南川さんとはすでに一定の共通了解を得たので，本稿ではあえて率直な言葉で評者の見解を述べていきたいと思います。

(2) 順に，①Johnston and Packer 1987 や Gordon 1995, 2004 : 152-9，②Berlant and Warner 1994 や Gordon and Newfield 1996，③Hesse 2000，④Gilroy 2004 や Gunew 2017 : 1-13，⑤Amin 2002, Wise and Velayutham eds. 2009, Swanton 2010 などを参照。なおここでひとまず「転裂」と訳した③の transruption は，批判的人種研究者のバーナー・ヘッセたちの造語で，差異が移り変わる（transfer）時と場において繰りかえし現れては，統一の語りに介入（interrupt）し，その虚構の一貫性に裂け目（rupture）を入れるといった運動を表す（Hesse 2000 : 17）。

(3) 社会と同じように，差異も「物ではない。それは経験を秩序立てるやり方なのである」（Leach 1961 : 304-5）。それを一つ一つと実体化し数えあげるような考え方は，差異の研究を大きく阻害する。交差性（inter-section-ality）もまた，「ジェンダー」，「民族」，「障害の有無」，等々といった区分け（section）がまずあり，それらを足しあわせていった化合物として人間をとらえるということならば，同じ数えあげの罠にはまってしまう。それはさまざまな立場性が絡みあった場で生きる経験の複雑性を示すための，便宜的な言葉に過ぎない。重要なのは経験であり，区分けあるいはカテゴリそれ自体ではないのである。

(4) ここでの対話の概念については Tully 2016 を参照。なお，このような不断の動きという点を考慮に入れれば，差異は出発時の視点としてあるだけでなく，より正確には，観察に沿って同伴しつづけるものと言える。差異は固定された舞台としてそこにあるのではなく，観察者とともにうみだされる過程の内にある（関連して Ingold 2011 : 9-13 = 2021 : 42-9）。

参考文献

Amin, Ash, 2002, “Ethnicity and the Multicultural City : Living with Diversity,” *Environment & Planning A,* 34（6）：959-80.

Berlant, Lauren and Michael Warner, 1994, “Introduction to ‘Critical Multiculturalism’,” David Theo Goldberg ed., *Multiculturalism : A Critical Reader,* Oxford ; Cambridge : Blackwell Publishers, 107-13.

Crosby, Andrew and Jeffrey Monaghan, 2018, *Policing Indigenous Movements : Dissent and the Security State,* Halifax ; Winnipeg : Fernwood Publishing.

Gilroy, Paul, 2004, *After Empire : Melancholia or Convivial Culture?,* London : Routledge.

Gunew, Sneja, 2017, *Post-Multicultural Writers as Neo-cosmopolitan Mediators,* London ; New York : Anthem Press.

Gordon, Avery F., 1995, “The Work of Corporate Culture : Diversity Management,” *Social Text*,（44）：3-30.

————, 2004, *Keeping Good Time : Reflections on Knowledge, Power and People,* London ; New York : Routledge.

———— and Christopher Newfield, 1996, “Introduction,” Avery F. Gordon and Christopher Newfield eds., *Mapping Multiculturalism,* Minneapolis ; London : University of Minnesota Press, 1-16.

Gunew, Sneja, 2017, *Post-Multicultural Writers as Neo-cosmopolitan Mediators,* London ; New York : Anthem Press.

Hage, Ghassan, 2015, *Alter-Politics : Critical Anthropology and the Radical Imagination,* Victoria : Melbourne University Press.

Hesse, Barnor, 2000, “Introduction : Un/Settled Multiculturalisms,” Barnor Hesse ed., *Un/settled Multiculturalisms : Diasporas, Entanglements, Transruptions,* London : Zed Books, 1-30.

Ingold, Tim, 2011, *Being Alive : Essays on Movement, Knowledge and Description,* London ; New York : Rout-

ledge.（柴田崇・野中哲士・佐古仁志・原島大輔・青山慶・柳澤田実訳，2021，『生きていること－動く，知る，記述する』左右社.）

Johnston, William. B. and Arnold. E. Packer, 1987, *Workforce 2000 : Work and Workers for the 21st Century,* Indianapolis : Hudson Institute.

Joppke, Christian, and Ewa Morawska, 2003,“Integrating Immigrants in Liberal Nation-States : Policies and Practices,”Christian Joppke and Ewa Morawska eds., *Toward Assimilation and Citizenship : Immigrants in Liberal Nation-States,* Basingstoke : Palgrave Macmillan, 1-36.

Kundnani, Arun, 2002,“The Death of Multiculturalism,”*Race and Class,* 43（4）：67-72.

Leach, Edmund, 1961, *Pul Eliya : A Village in Ceylon : A Study of Land Tenure and Kinship,* Cambridge : Cambridge University Press.

Lentin, Alana, and Gavan Titley, 2012,“The Crisis of ‘Multiculturalism’ in Europe : Mediated Minarets, Intolerable Subjects,”*European Journal of Cultural Studies,* 15（2）：123-38.

Swanton, Dan, 2010,“Sorting Bodies : Race, Affect, and Everyday Multiculture in a Mill Town in Northern England,”*Environment and Planning A,* 42（10）：2332-50.

鄭暎惠，2021，「書評　南川文里著『未完の多文化主義－アメリカにおける人種，国家，多様性』」『社会学評論』72（2）：171-2.

Tully, James, 2016,“Deparochializing Political Theory and Beyond : A Dialogue Approach to Comparative Political Thought,”*Journal of World Philosophies,* 1（1）：51-74.

Wise, Amanda and Selvaraj Velayutham eds., 2009, *Everyday Multiculturalism,* London : Palgrave Macmillan.

米山リサ，2003，『暴力・戦争・リドレス－多文化主義のポリティクス』岩波書店.